探訪 ながれ 87

那珂川町郷土史研究会

裂田溝14　小柳地区周辺

裂田溝は国道385号の下をくぐり抜け、荻原堰の石柱を通り小柳地区へ流れています。荻原堰から下流20mの間は、道路幅が狭いせいか水路側にガードレールが設置されています。昔は、この辺りに「馬の川入れ」と言われた牛馬の洗い場があった所です。

「橋-5」は川幅いっぱいに二本の切り石を渡し架けただけの狭い橋でしたが、車力や馬車に代わって車が通るようになり、生活様式が変わるにつれて橋幅も広くなりコンクリートで覆われ補強されてきました。橋を渡ると「汲ん場-ワ」があります。そばに「那珂川八十八ヶ所番外チ」日切地蔵を祭るお堂があり、数枚の絵馬が奉納されています。お堂の西側にイチジクの木、東側に渋柿の大きな木があります。イチジクの実が熟れるころは溝の水量が最も多いときで、水面いっぱいに張り出した枝からおいしそうな実が「チャポン、チャポン」と落ちる様子を残念そうに見るしかありません。渋柿も同様で、干し柿にする人も今はいないそうです。「橋-5」の3m下流に「汲ん場-カ」があり、道路北側の人たちが利用されています。向かい合わせに「汲ん場-ヨ」があります。こちらの家の人は「小学生のころ、学校から帰るとすぐ裸になって裂田溝に飛び込み、潜り、橋をくぐって遊んでいました。溝の石垣の穴の中にはウナギがいて、針にミミズをつけて釣り上げていました。ナマズもいましたが、天災が起こるときには大きなナマズが『なまずのかまど』から出てくるというので大事にされ、決して食べることはしなかったそうです。また、ふろの水汲みは子どもたちの仕事でした」と語られています。川沿いの家ではそれぞれ汲ん場を持ち、米を研いだり野菜を洗ったりと、裂田溝はかつては重要な生活用水としての役割を担っていました。水辺沿いに残る蔵の周囲では、季節の樹木がさまざまな彩りで道行く人を楽しませてくれます。青くこんもり茂ったササ、赤や白のナンテン、ツバキ、ツツジ、エゴの木、ビワの木。特に晩秋のころともなると、大小5本のハゼの木の紅葉は見事です。戦後まで、ロウソクの原料として筑後方面から買い付け業者が来ていたそうです。「ハゼの実を売ったお金で、学制服を買ってもらった」と懐かしく語る古老もいらっしゃいました。今ではハゼの実を知る人も少なくなりましたが、藩政時代農民の窮乏を救った郷土の先覚者『高橋善蔵翁』とハゼとの歴史に思いを寄せるとき、時代をつないできたハゼの原点をここに見る思いがします。先ほどの家では、ハゼの実をまいて苗木を育てながら「ハゼの里」の景観づくりにも心を配っておられます。すぐ下流に架かる「橋-6」は、溝より奥の人たちが渡る狭い橋で、車などは通れません。

次回は「汲ん場-タ」より紹介します。

我が姿うつる姿を眺めつつ
朝あさ歩く溝に添いて
絹枝

コースメモ

24. 汲ん場－ワ
25. 橋－5
26. 汲ん場－カ
27. 汲ん場－ヨ
28. 橋－6

次号へ
29. 汲ん場－タ

史跡メモ

日切地蔵
（那珂川八十八ヶ所番外チ）

橋－6付近のハゼの木
6月の田植え時期になると、この辺りから寺山田橋（八田橋）にかけてホタルが見られます。

汲ん場－ヨ
「ここに嫁に来るには、七代善根を積まんといかんとよ」と言われて嫁いで来ました。生活を支えてくれた溝に感謝し、水を汚さないよう心掛けています。

橋－5

日切地蔵「那珂川八十八ヶ所番外チ」

汲ん場－ワ

橋－6

「疏水百選」に選ばれた裂田溝の小柳地区の風景
疏水百選とは、農林水産省が日本の美しく豊かな「水、土、里」を育て維持していくことを目的に、全国から優れた百の農業用水路を選出したものです。

小柳地区入口付近